

吐き出す息が、白くにごった。早朝の澄んだ空気の中で、珠はそのことに気づく。

もう春のはずだが、こうして時々寒の戻りがある。けれど、うんと寒くなった後は、どんどん暖かくなるばかりだ。

まさか、季節の移ろいを同じ勤め先で感じられるとは思っていなかった。

珠はしみじみとしながら身支度を調べると、台所へ向かう。

どこからともなく家鳴り達が現れて周囲につどうのに、珠は自然と頬が緩んだ。

「おはようございます。朝ご飯を作りましょうね」

かまどのほうを見てみると、羽の先が燃えているヒザマがひょいひょいと歩いてきており、当然のように焚き口の中に居座る。ヒザマにも礼を言った珠は、朝食の支度を始めた。

まもなくゴトリと、台所の板の間まで歩いてきた火鉢には炭火を入れてやる。

ここに来てから習慣になった事だ。普通の家であれば、珠が炭を持って入れに行くか、再び火起こしが必要だ。けれどこの陶火鉢は自ら歩いてきてくれるため、大変助かる。

そうして家鳴り達と米を炊き、出汁を引いていると、居間のほうから歩いてくる音が聞こえた。

この屋敷で人のように歩いてくるのは、家主であり、珠の雇い主である銀市だけだ。

ただ歩調が、いつもよりどこかゆったりとしているような？

気のせいだろうか、と不思議に思いつつも珠は挨拶をしようと振り返る。

「おはようござ……います？」

珠の言葉は尻つぼみになってしまう。

予想通り、そこにいたのは銀市だった。

「……ああ、珠、おはよう」

寝間着の浴衣に綿入り羽織を着込んだ彼は、ふらりふらりと台所へ入ってくる。

珠が目を吸い寄せられたのは、銀市の髪だ。どこか眠そうな顔を彩る癖のある髪が、滝のしぶきのような銀に染まっていたのである。

確かに彼の髪が本来は銀色だということを、珠はあの事件で知った。

けれど、この屋敷で変化しているのを見たのが初めてで、思わず息を呑んで立ち尽くしてしまう。

だが、珠の動揺に気づかない銀市は、彼女に向けて願った。

「水を……くれないか、顔を洗いたい」

「は、はいっ」

我に返った珠は、いそいそと瓶長から水を桶にくみ上げ差し出す。礼を言って受け取った銀市は板の間に桶をおくと、のんびりと水を使い始めた。

銀の髪はまだ結われていないため、彼が顔を洗うたびに濡れそぼり、さらに艶を帯びる。老人の白髪と似た色彩だったが、彼の髪は雪景色のような美しさがあつた。ちょうど、朝日が差し込み、銀髪から落ちた水滴が光を反射する。

そこではっと気づいた珠は、台所にとって返すと、真新しい手ぬぐいを持ってきた。

水を使い終えた銀市が「しまった」という顔で呆然とするのに、その手ぬぐいを差し出した。

「どうぞ」

「ああ、ありがとう」

手ぬぐいで水滴をぬぐい、なんとか目が覚めたようで、銀市は珠を見て金色の瞳を訝しそうにする。

「どうかし、た……ああ」

銀市はようやく自分の視界にゆれる濡れぼそった銀髪に気づき、決まり悪そうにした。

「もしかして瞳もそのままか」

「あの……はい」

珠がおずおずと頷くと、銀市は小さく息を吐いて、髪をひと撫でする。

すると、銀の髪はあつという間に漆のような黒に染まり、金色の瞳も漆黒になっていた。

そのまま、袖から髪紐を探り出すと、銀市は髪をまとめながら淡々と語る。

「すまないな、寝ぼけていたんだ」

「いえ、そのお気になさらず……」

いつもの通りうなじで髪をくくった銀市に珠はそう返したが、勤め始めてから初めての遭遇だった。

「あの、もしかして、今まで私に見られないようにされていたのでしょうか」

「……まあ、普通の人間はころころと髪や目の色が変わりはしないからな。今までは君が起きる前に水を使っていたんだ。が、今日はまた寒かっただろう。起ききらん頭で目を覚まそうとして、確認もせず来てしまったんだ」

首をさすりながら語る銀市だったが、しまったと口を押さえる。

そこまで言うつもりはなかったのだろう。

本当に、気が抜けているらしい。珠が見つめる先で、ふいと顔をそらした銀市の耳は、かすかに赤らんでいる。冷たい水を使ったせいではないのは、珠にもわかった。

「ところで、家鳴りが主張しているが」

「あっごめんなさいっ。ヒザマさん、火を弱めてくださいね」

『くけっ』という返事と共に火は弱まり、吹きこぼれそうだった鍋が収まる。ほっとした珠はこれだけは言わなければと、銀市に向き直った。

心の中で、確認してから口にする。

「銀市さんが、私に気を使われる必要はございません。いつでもいらしてください」

「君をむやみに怖がらせるのは、本意ではないんだが」

「私は、怖がっておりましたか……？」

なぜそのような事を言うのか分からず、珠は首をかしげると銀市は眉を寄せた。

「先ほど、固まっていただろう」

「っ」

珠が銀市をまじまじと見てしまっていた事だと思い至り、かあと頬を赤らめ狼狽える。しかし、まさか本当のことを言うわけにはないだろう。

銀市の髪が、まるで滝の飛沫のように清冽で美しく見蕩れてしまっていた、なんて。

男性に美しいという単語を使うのが常識外れな事くらい、珠にも分かっているのだ。

けれども、銀市を誤解させたままなのは良くない。

珠がためらっている間も、銀市は案じるようにこちらを伺っている。

仕方なく、己の指を握り勇気を奮い起こすと、珠は訴えた。

「その、髪が……」

「俺の髪？」

「日差しに、きらきらとしていて、見とれて、しまった、んです……」

最後は消えるように言葉を紡いだ珠は、目を見開く銀市に耐えきれず頭を下げた。

「申し訳ありません、お気を悪くされましたら、罰を」

「いやいや、君が気味悪く思わんのなら良いさ。なら、少し緩んでも良いだろうか」

そう、申し出られた珠は、そろりと視線を上げる。

銀市は不快そうにはしておらず、むしろ気ははずかしげに目元を緩めていた。「実は、朝があまり得意ではなくてだな。うっかり寝ぼけて銀に戻っていても、驚かないでくれるか」

「えっあつもちろんです」

「助かった」

珠がこくこく頷くと、銀市はほっとした顔になる。

その、安堵はあんまりにも真に迫っていて。

珠がぼかんとしている間に、銀市は着替えてくると言い残して去って行く。家鳴りに裾を引かれたため、朝食の支度を再開したが、なんだか胸がぼわぼわする。

「あの、家鳴りさん達、銀市さんは、もしかして、前から朝が弱い方だったのですか？」

珠が家鳴り達に問いかけると、家鳴りが出したのはぱちぱちと明るい音だった。

明確な肯定である。まったく、気づかなかつた。

それを珠を驚かせてしまうからという理由で、努力してくれていたことには申し訳なさを感じる。けれど、こうして、秘密を明かした後は気を緩めてくれた。

うまく言葉に表せないが、それが、無性に嬉しい。

なにより本当に、男性へ抱く感想ではないのは、重々承知しているのだが。

「なんだか、可愛らしい、ですね？」

珠がつぶやくと、からからぱちぱちと、家鳴り達は楽しげな音を鳴らしたのだった。